

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.26 No.8 August 2025

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



8

CONTENTS

・巻頭言

「世界神話学説」

／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」(20)

明治 22 年 9 月

／深谷 耕治 2

・英語文献にみる天理教 (11)

『The Gist of Japan』(1)

／尾上 貴行 3

・音のちから—中国古代の人と音楽 (27)

文物が語る音の世界—四絃の琵琶—

／中 純子 4

・ブラジルの宗教的風景 (7)

アンテペラム期の米国系プロテスタン
ト教会による布教活動①

／中西 光一 5

・2025 年度公開教学講座：「元の理」の 学術的研究とその新しい展開を求めて (2)

第 2 講：「元の理」の人種理論・平等
思想

／中西 光一 6

・おやさと研究所ニュース 7

第 376 回研究報告会 (4 月 15 日) /
写真展「天理大学 100 年」第 2 期
ご案内

巻頭言

「世界神話学説」

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

世界中には似通った神話が見られる。よく知られるところでは、洪水によって世界がリセットされる洪水神話、天空神と大地神の交わりによって世界が誕生するタイプの創世神話、死体から作物が生えてくる死体化生神話、双子が国造りなどで重要な役割を果たす双子神話、英雄やトリックスターが火を盗んできて人間社会にもたらす盗火神話などがある。似通った神話が世界中に存在する理由を説明する理論として、大きく分けると伝播主義と構造主義の 2 つの学派がある。前者は、世界中の似通った神話には起源地があり、そこで生まれた神話が人類の移動や交易などによって各地域に伝播していったと捉える。一方、後者は、世界各地に散在する似通った神話は人類の思考様式の普遍性 (psychic unity) によるものと考え。平たく言えば、人間の思考様式は同じなので、神話も似通ってくるというわけである。

従来の伝播主義による説明では、全く接触のなさそうな地域に似通った神話が存在する理由を説明することができなかった。北米大陸やポリネシア島嶼部など、ある程度の文化接触が生じうる地域内であれば伝播主義理論は力を発揮する。だが、あまりにもかけ離れた地域に類似の神話が存在する場合、人間の二項対立 (生と死、自然と文化といった 2 つの対立概念) に基づく思考様式が類似の神話を生み出すとする構造主義理論の方が有利であったと言える。例えば、ギリシア神話にはプロメテウスが火を盗む話があり、ハワイを含むポリネシアの神話にもマウイが火を盗む話があるが、その類似性を説明するのは伝播主義理論には荷が重かったわけだ。

ところで、近年、この伝播主義のパラダイムに属する新たな仮説が打ち出されている。ハーバード大学のマイケル・ヴィッツェルが唱えた Gondwana 型神話群とローラシア型神話群という二大系統に神話を分類する学説である。後藤 (2017) はそれを「世界神話学説」

と名付けている。この学説がこれまでの伝播主義理論と異なるのは、遺伝学や考古学による人類移動に関する近年の研究成果によって仮説を補強している点である。

古いタイプの Gondwana 型神話 (というより神話的思考) はアフリカで誕生したホモ・サピエンスが持っていた神話で、彼らの出アフリカに伴ってオーストラリア大陸や新大陸などに伝播したとされる。その特徴は、宇宙の創造については語らず (世界は初めから存在する)、断片的な物語の集合体である点にある。一方、新しいタイプのローラシア型神話は、ホモ・サピエンスが世界各地に移住した後に西アジアの文明圏で生まれ、そこから各地に伝播したとされる。それは私たちに馴染みのある神話と言ってよく、世界の無からの創造、神々の系譜や世界の秩序化、人類の出現やその後の大洪水など、叙事詩的な語りとなっている。

10 万年ほど前に出アフリカを始めた時点で、ホモ・サピエンスが「物語る」ことのできる言語能力を持ち、その物語を文化として共有し次代に伝えることができていたということをヴィッツェルがどのように証明しているのかは分からない。また、古層の Gondwana 型神話は、叙事詩的なストーリーラインを持つローラシア型神話と並列することのできる「神話」なのかという疑問も生じる。それは神話の前駆的なナラティブ形態であって、オーストラリアのアボリジニ文化などに純粹な形で保持されているが、ローラシア型神話の中にも組み込まれている神話的思考なのではないか。この学説には幾つかの問題点があるように思えるが、ホモ・サピエンスの初期移動の時代にまで遡って人類史の中で神話を捉えようとするスケールの大きな仮説であることには間違いなく、大変興味深い。

〔註〕

(1) 後藤明 (2017) 『世界神話学入門』講談社現代新書。

明治 22 年 9 月

天理大学人文学部講師

深谷 耕治 Koji Fukaya

増野正兵衛夫妻は、明治 17 年に教祖に初めてお目にかかったときから「いずれはこの屋敷に來んならんで」とのお言葉を頂き、その後おぢばへの伏せ込みを度々促されていた。しかし、なかなかその踏ん切りがつかず、夫婦ともに度々身上の障りを頂き、その都度「おさしづ」を伺って神意を思案してきた。おぢばへの伏せ込みは、一時的なものではなく生涯の伏せ込みであり、また、それは正兵衛一人ではなく一家の伏せ込みである。周りの者も十分に納得しなければならない。そのため、関係者一同で談じ合いも重ねてきた。明治 22 年 9 月に、正兵衛夫妻はそろって咳の患いをいただいた。いよいよ心定めをのときを迎える。

- ・明治 22 年 9 月 10 日（陰曆 8 月 16 日）：増野正兵衛咳の障り伺
- ・9 月 16 日（陰曆 8 月 22 日）：明二十三日兵神分教会月次祭なるも、清水与之助事情のため帰る事出来ず、よって増野正兵衛代りて神戸へ帰る事増野より伺
- ・9 月 19 日（陰曆 8 月 25 日）：増野松輔足障り伺、（増野正兵衛八日の日おぢばへ夫婦連にて参詣、その日松輔徴兵検査より帰る道にて、不意の足障りに付伺）
- ・9 月 21 日（陰曆 8 月 27 日）：清水与之助身の障り願
- ・同日：清水与之助帰会の願
- ・9 月 23 日：増野正兵衛夫婦去る十四日より咳障りに付伺／同日、押して、妊娠中身二つになるまで、神戸に居るも宜しきや願

明治 22 年 9 月 8 日、正兵衛は妻いと夫婦揃っておぢばに帰ってきた。その 2 日後の 10 日、正兵衛が「咳の障り」で伺うと「心をどんと据えてくれ」「一日の日生涯という心を持ってくれ」と、案じ心を持たずに心を定めることを諭されている。正兵衛たちに直接的な表現で伝えられていることが分かる。14 日には、夫婦そろって咳の症状が出ていた。

16 日には、兵神分教会の月次祭に清水与之助が諸事情で教会に戻れないため、正兵衛が代理で戻ることについて伺っている。冒頭で「さあへ所々々に皆楽しみ積んで功を積む」と、人々の「楽しみ」と「功を積む」（神様の御用をすること）について述べて、「所々日々尽す処、いついつまで変わらんよう、急いで運んでくれるよう」と許されている。

19 日、正兵衛の甥・増野松輔（姉まちの長男）の「足障り」について伺っている。正兵衛夫婦がおぢばに帰った 8 日に、松輔は徴兵検査を受けており、その帰り道に不意に足に障りが出たようである。「どう成るもこう成るもいんねんへ、どんないんねんもある、どうもならんいんねんもある」と「いんねん」について述べられ、「話一条、話人間拵えた時の話、一人処どうある」と元初まりの話の受け取り方について諭されて、さらに「案じるというは、真に受け取る理が分からんから案じる」と述べられている。人間創造の話聞いても、その受け取る理が分からないことから案じ心が生じて来ると諭されているのではない。

21 日、清水与之助の身の障りについて伺っている。「どういう理を治めたらよかるへ。何も分からんから、理と理で抑えねばならん」と理の伝え方について述べられて、教祖が正月 26 日に現身を隠されるまでのひながたを頼りに、「今一時の理

を見て、先々の楽しみを治めてくれるよう」と諭され、「治まって暫くの間、何でも踏ん張るという」と伝えられている。さらに同日、与之助が教会に戻る際に伺うと、「さあへ所々治まって一つの理を治め。又身の処一つ心得ん。一日の日という、それへ治まって一日というへ」と諭されている。

23 日、正兵衛夫妻は、10 日間ほど続く夫婦そろっての咳の身上の障りについて伺うと、まず「内々た一つ理が立っても日々の理がある。めんへ一時一つの理が心に治まり難い」と、内々において一時的な理の立て方は出来ていたとしても、日々通る中に 1 つの理が心に治まり難いと諭されている。その上で、「十分に理に治め、治まりに理が日々思う、思わす。治めるなら身に障り無い」と、十分に理を心に治めるように諭されている。正兵衛夫妻にとって、おぢばへの伏せ込みはこれまで何度も諭されてきたことであり、その都度心定めをしてきたことであろう。しかし、そのような心定めも日々の生活の中で次第に薄れていったのだと推測される。この「おさしづ」を伺ったとき、妻のいとは妊娠中であつた。しかも結婚 15 年目にしての懐妊だつた。そこで、「押して妊娠中身二つになるまで、神戸に居るも宜しきや願」と、なおもおぢばへの移転の延期を願っている。「どちら一つも同じ理」と述べられ、具体的な指図はなく、「どちらどう、こちらこう、めんへ心一つの理を治めるなら、いかなる安心さへねばならん」と親に安心してもらふような心の理について諭されている。

『増野正兵衛伝』によれば、この明治 22 年 9 月 23 日の「おさしづ」を受けて、おぢばへの移転を決めた。⁽¹⁾ 正兵衛としては、おぢば伏せ込みを一刻も早く果たしたかったのであろう。明治 22 年 7 月に、おぢばの土地を購入していることからそれは伺える。何より、教祖にお目にかかっていた頃から、おぢばを離れて神戸に戻ると体調を崩してしまうのであつた。正兵衛は、そのような不思議を身をもって感じていた。しかし、一家の引越は、正兵衛の一存で決定できることではない。「おさしづ」では、正兵衛に対して内々を治めることや、談じ合いを重ねることが諭され、その他の家族には心を定めることが説かれてきた。教祖が現身を隠されてからのおよそ 2 年間、増野家にとっておぢばへの伏せ込みが大きなテーマであつたといえるだろう。

「身上さとし」の観点からいえば、この時期の増野家に対する身上の障りは、それがどのような症状であつたとしても何らかの意味でおぢば伏せ込みに関わっていると考えられる。とくに正兵衛はさまざまな症状について伺っている。しかし、それは 1 つの症状に対して 1 つの具体的な神意が込められているというよりも、おぢばへの伏せ込みという同じテーマに対して、さまざまな仕方で伝えられていると考えられる。異なる症状が現れたからこそ、正兵衛もその都度「おさしづ」を伺おうとしたのではない。親神としてはおぢばに正兵衛たちを引き寄せようとは思いつつも、当人たちがそうした心になれるまで「おさしづ」を通して気長に育てていった。いんねんあるものでも、心定めが第一ということなのだろう。おぢばによろしくを引き寄せる苦勞が感じられる。

〔註〕

(1) 『増野正兵衛傳』(私家版、1923 年)、56 頁。

『The Gist of Japan』 (1)

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前回までみてきた D.C. グリーンの論文は外国人による天理教研究の最初期の文献であるが、この論文が発表された 19 世紀末ごろには、このほかにも日本でキリスト教伝道に従事する宣教師によって書かれた日本や日本の宗教についての出版物が多数発行されている。今回はそのようななかから、グリーンの論文発表から 2 年後の 1897 年に出版された Rufus Benton Peery (ラファス・ベントン・ピーリー) 著『The Gist of Japan: The Islands, Their People, and Missions』(日本の要点: その島々、人々、伝道) を取り上げてみたい。この書籍は、アメリカの Fleming H. Revell Company によって出版された。日本の宗教事情を紹介するなかで、天理教についてもそれなりの紙面を割いて紹介しているのが一つの特徴として挙げられる。当時の欧米で発行されていた新聞や雑誌でこの書籍の紹介が散見され、欧米社会でより多くの人々の目に留まった可能性もある。

著者のピーリーは、アメリカ合衆国のルーテル派の宣教師であり、1892 年に来日し、1903 年に帰国するまでの 11 年間で、主に佐賀県や熊本県などで宣教活動に従事している。略歴は、以下の通り。

1868 年 4 月 8 日 ヴァージニア州パークス・ガーデンに生まれる

1892 年 ゲティスバーグ神学校卒業

1892 年 11 月 23 日 来日、先に赴任していたジェームス・シェーラーと東京で合流。

1893 年 1 月 シェーラーが宣教地と定めた佐賀へ赴任。

同年 3 月 遅れてピーリーが佐賀へ到着、伝道開始。のちに小城、久留米、熊本へと展開。

1897 年 『The Gist of Japan』を佐賀で執筆、アメリカで出版(アメリカ、イギリス、そして日本で広く読まれた)

1903 年 アメリカに帰国(日本滞在期間 11 年間)

帰国後はペンシルベニア州、コロラド州、イリノイ州、オハイオ州、ノースカロライナ州などで牧師と大学の教師を務める。

ピーリーは、この書籍執筆の経緯について、日本という国またその人々について多くの出版物が英語で発行されているが、日本でのキリスト教の宣教活動について詳しく書かれてものはまだ多いとは言えない状況であり、日本の一般民衆の様子を描き、今後の宣教活動に資することを旨とした旨を、序文で述べている。この書籍は 320 ページほどあり、その目次は以下のとおりである。

I. The Land of Japan (日本の国土)

II. A Brief History of the Japanese People (日本人略史)

III. Japanese Characteristics (日本の特色)

IV. Manners and Customs (礼儀と習慣)

V. Japanese Civilization (日本の文明)

VI. Japanese Morality (日本の倫理)

VII. Religions of Japan (日本の宗教)

VIII. First Introduction of Christianity (基督宣教初期)

IX. Modern Roman and Greek Missions (現代のカトリックと正教の宣教)

X. A Brief History of Protestant Missions in Japan (日本でのプロテスタント宣教略史)

XI. Qualifications for Mission Work in Japan (日本での宣教活動のための資格)

XII. Private Life of the Missionary (宣教師の私生活)

XIII. Methods of Work (宣教活動の方法)

XIV. Hindrances (障害)

XV. Special Problems (特別な問題)

XVI. The Outlook (展望)

大枠でとらえると、VII. Religions of Japan (日本の宗教) までが、日本の紹介となっており、書籍の半分弱を占めている。VIII. First Introduction Of Christianity (基督教宣教初期) からが、日本におけるキリスト教の宣教の歴史と現状について書かれており、まさにピーリーの執筆の目的の部分にあたる。

日本の宗教事情について書かれているのが、VII. Religions of Japan (日本の宗教) である。ピーリーは、「日本にはすでに確立した 4 つの宗教があり、それは神道、仏教、儒教、そして天理教である」と書いて、この章を始めている。

まず、はじめに日本人は生来信心深い人々であるとして、「古代においては、迷信や神話的な考えが複合的にひとつに合わさって、宗教としての働きを担っていた。呪物崇拜、男根主義、精霊信仰、木々や蛇への信仰は非常に一般的であった。創造者と被造物の区別は明確ではなく、神々と人間は混ざり合っていて、別々には考えられていなかった。」と説明している。しかし、日本古来の信仰について探求することは本書の目的ではないので、神話的な宗教形態について述べることはせずに、あくまでも現代日本の宗教について簡単に説明したいと述べ、次のように話を進めている。

日本の現代宗教は、神道、仏教、儒教、そして天理教の 4 つである。神道と天理教は土着のものであり、仏教と儒教は中国や朝鮮から入ってきたものである。天理教が始まったのは最近であり、他の宗教ほどの影響力をもっておらず、また地位も確立されていない。神道、仏教、儒教は、何世紀にもわたり、この地で共存してきた。これらの間にはさほど大きな対立はなく、それはキリスト教と民族宗教の関係と同様である。多くの人々は、同時にこの 3 つの宗教の信者であり、彼らは神学を神道から、救済論と終末論を仏教から、道徳や経済観念を儒教から、それぞれ得ている。そのため、これら 3 つの宗教を信じ、社に向かって拝むことに矛盾は感じられていない。実際、これらの 3 つの信仰は非常に混ざり合っているため、各信仰の考えと実践は、その他へと浸透しており、それぞれの純粋な教えを見分けることは困難である。人々の頭の中では、これらは細かく分けられていない。しかし、その起源、歴史、そして教えに関しては、それぞれに違いがあり、独自の信仰となっている。

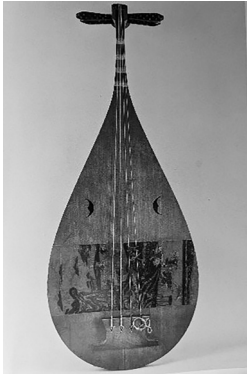
[参考文献]

R.B. Peery 『Lutherans in Japan』 Lutheran Publication Board of the United Synod, 1900. 青山四郎訳『ピーリーの日本伝道開始の記録』グロリア出版、1982。

文物が語る音の世界—四絃の琵琶—

琵琶は外来楽器か

シルクロードを通して西域より中国にもたらされた楽器が、さらに東漸して日本に伝来した。正倉院にはそうした古楽器が一千数百年の長きにわたって収蔵されている。左図は正倉院楽器の紫檀木画槽琵琶（『正倉院宝物にみる楽舞・遊戯具』紫紅社、1991年、以下同じ）である。その草貼^{かんばつ}の捍撥部には下図のような狩獵図が描かれている。また楓蘇芳染螺鈿槽琵琶の捍撥部には、最下図のように騎象の人物が描かれていて、それを見る者が受ける印象は、七絃琴など古来中国の伝統を受け継ぐ楽器とはいささか異なっている。そもそも四絃の琵琶は、いつから中国で用いられているのか。



紫檀木画槽琵琶（『正倉院宝物にみる楽舞・遊戯具』紫紅社、1991年、以下同じ）である。その草貼^{かんばつ}の捍撥部には下図のような狩獵図が描かれている。また楓蘇芳染螺鈿槽琵琶の捍撥部には、最下図のように騎象の人物が描かれていて、それを見る者が受ける印象は、七絃琴など古来中国の伝統を受け継ぐ楽器とはいささか異なっている。そもそも四絃の琵琶は、いつから中国で用いられているのか。



琵琶は、「枇杷」とも書かれ、後漢の劉熙『釈名』釈楽器に「枇杷は本と胡中より出づ、馬上に鼓する所なり。手を推して前むを枇^{すす}と曰い、手を引いて却^{しりぞ}くを杷^いと曰う。其の鼓する時を象^{かたど}りて以て名と為すなり」とある。枇杷とは、その演奏技法から付けられた名である。同じく後漢の應劭『風俗通義』卷六「声音」には、その形状から「長さ三尺五寸は天・地・人と五行^{のつと}とに法り、四絃は四時を象^{かたど}る」とする。後漢にはすでに天地人や五行という中国的な思想を纏^{まと}っていた楽器であること、四絃であることを、あらためて確認しておきたい。ちなみに、果物の枇杷はその葉の形状が楽器に似るので命名されたとい



われている。前漢の司馬相如「上林の賦」（『史記』司馬相如伝）には、果樹の1つとしてすでに橙や柿などとともに「枇杷」と記されている。ならば、楽器枇杷（琵琶）の出現はそれよりも前ということになるのかもしれない。とにかく、琵琶は、古くから中国で用いられた楽器であることは確かである。日本の三味線は、室町時代の末に、中国から琉球をへて日本本土に伝来したと推測されている（『日本の伝統芸能講座 音楽』淡交社、2008年、240頁）。すでに江戸時代には、三味線は外来音楽としてではなく、巷に聞こえる音楽の代表とも捉えられてきた。それは、流入してから十分に熟成するための時間があったからだとも言われている（田中優子『江戸の音』河出文庫、2008年、157頁）。中国の四絃琵琶と日本の三味線を同列に扱うことはできないが、琵琶が中国にとって外来楽器であったとしても、上述した文献の記載にあるように中国化する時間が十分にあったことは否めないであろう。

王昭君と琵琶

琵琶に胡楽のイメージが付き纏うのはなぜであろうか。先ほどの『釈名』釈楽器に「枇杷は本と胡中より出づ、馬上に鼓する所なり」とあったが、それがいつからか漢の元帝のときに匈奴に嫁がされた悲劇のヒロイン王昭君と結びついたことも、その1つの要因といえるかもしれない。詳しくは、山本敏雄「王昭君説話と琵琶」（『愛知教育大学研究報告』53 2004年）にみえる。簡単に紹介すると、王昭君が琵琶を奏でたという記載は、漢代の資料にはもちろん、唐代になるまで全く見られなかった。ただ、晉の石崇（249～300）「王明君の詞 并びに序」（『文選』巻27）に、漢の武帝のときに烏孫に嫁がされた公主について、馬上で琵琶を奏でてその旅路を慰めたので、王昭君（王明君ともいう）のときもきっと同じであったろう、と推測しているだけであった。しかし、唐代になると琵琶の音色と王昭君の匈奴の地に対する嫌悪感や望郷の念を深く結びつけて表現する詩が白居易などによって作られて、それが宋代になって王昭君が匈奴へ嫁がされた悲しみを琵琶に託して奏でたとなったという。

王昭君の逸話のほかにも、琵琶に胡楽のイメージがあるのは、有名な王翰「涼州詞」の、「葡萄の美酒 夜光の杯 飲まんと欲して琵琶馬上に催す」の句や、白居易「李士良の琵琶を聴く」詩の、「声は胡兒の舌語を弾ずるに似、愁いは塞月の辺雲を恨むが如し」という、辺塞と結びついたイメージが繰り返し詠じられることによるのかもしれない。中国に伝わって唐にいたる何百年の歳月をへてもなお琵琶に胡楽のイメージがあるのは、こうした詩文の影響であると考えられよう。

唐代の長安の音

琵琶が唐代になって詩文に描かれ、もてはやされたのは、それが都の音の象徴であったからではないだろうか。白居易「琵琶引 并びに序」が書かれたのも、白居易が江州（江西省）という田舎へ左遷されて無聊を託つなかで、「舟中に夜 琵琶を弾く者を聞く、其の音を聴くに、錚錚然として京都の声有り」と、耳にした琵琶の音に都の華やぎを感じたからであった。その白居易の琵琶の描写が、無限の思いを説き尽し、音を人間のことばに喩えて描写していくことについては、中木愛氏の『白居易の幸福世界』（勉誠出版、2015年、第五章第五節「白居易と琵琶」）に詳述されている。感情の起伏を繊細に表現するほどに、唐代中期には琵琶は洗練されていたのである。我が国にも琵琶はもたらされていたが、とりわけ仁明天皇の承和五年（838）に遣唐使判官として入唐した藤原貞敏が、楊州の廉承武から受伝した『琵琶諸調子品』一卷には、琵琶の二十八調が書かれており、林謙三氏は「わが国における琵琶の調絃の主流は、まったく貞敏のもたらした諸調子品から出ていることをみとめ、また奈良時代に伝えた唐の古説とは、やや異なるところのある中唐の新説がわが琵琶調の直接的根源であることを知るのである」（『雅楽—古楽譜の解説』音楽之友社、1984年、274頁）とする。つまりは、白居易の生きた唐代中期には琵琶の調絃法が確立し、広く普及していたことがわかる。琵琶の調絃から導き出された二十八調が、唐代以降の中国音楽に大きな影響を及ぼすことから、琵琶という楽器は、もはや外来楽器とはいえず、むしろ主要な中国楽器の1つといっても過言ではなさそうである。冒頭にみた正倉院琵琶の意匠は、外来を印象付けるのではなく、都の華やかな賑わいを象徴するものと受け取るほうがよさそうに思えてくる。

アンテベラム期の米国系プロテスタント教会による布教活動①

おやさと研究所講師

中西 光一 Mitsukazu Nakanishi

アメリカの南部人によるブラジルの植民地戦略は、さまざまな社会的セクターと連携しながら実行されたが、すでにいくつかの植民地事例を見てきたように、その試みは決して順風満帆ではなかった。ノリス植民地が成功を収めた要因として挙げられるのは、農業植民活動を通じて南部人がブラジル人との協力関係を深め、ホスト社会への不満を軽減し、文化的差異による困難を克服できた点にある。その結果、彼らは次第にホスト社会において確固たる地位を築いていった。ここで強調しておきたいのは、その過程において彼らの宗教観も重要な役割を果たしたという事実である。実際、彼らの農業活動の発展と並行して、1870年代以降、ブラジルにおける米国系プロテスタント教会の伝道活動は次第に活発化していった。そこで今回から、本連載の核心である南部人の伝道活動について、より詳しく見ていくことにしたい。

米国系プロテスタント教会の動向を論じるにあたり、まず時期区分を明確にしておきたい。南北戦争（1861年～1865年）を基点とし、戦前の「アンテベラム期（antebellum）」と戦後の「ポストベラム期（postbellum）」に分け、それぞれの時代に展開された宣教師たちの活動や手段、さらにそれを支えた国是や政治思想にも焦点を当てる。彼らがいかにして「宗教フロンティア」への探究心を育んでいったのか、その歴史的・社会的コンテキストを概観することとしたい。

モンロー教書とアメリカ帝国主義

そもそも、なぜアメリカ人宣教師がブラジルで伝道活動を行う必要があったのだろうか。この問いに対しては、単に南部人の植民地が存在したという事実だけでは十分な説明にはならない。実は、アメリカ政府が恣意的に掲げた外交理念の一つである「モンロー主義」が、重要な鍵概念となる。このモンロー主義は、第5代アメリカ合衆国大統領ジェームズ・モンローによって1823年に連邦議会へ提出された大統領教書（モンロー教書）に示された外交方針に基づくものである。モンローの主張の核心は、ヨーロッパ諸国によるアメリカ大陸への植民地支配や政治的干渉を強く牽制し、「欧州諸国は西半球にこれ以上関与すべきではない」と明言する点にあった。アメリカ合衆国は、1776年に独立宣言を発表し、アメリカ大陸で最初に主権国家として独立を果たした国である。一方、ブラジルを含むラテンアメリカ諸国の植民地解放闘争は19世紀に入ってから本格化しており、モンロー主義はまさにこうした独立運動を支援・正当化する目的で表明された外交理念であった。

しかし、モンロー主義は次第にアメリカ帝国主義的なイデオロギーを帯びるようになり、ラテンアメリカ諸国に対するアメリカ合衆国の軍事介入や政治的圧力を正当化する口実ともなった。換言すれば、アメリカは自国の国益を守るため、かつて植民地支配を進めたヨーロッパ列強の後継者として自らを位置づけ、ヨーロッパと対等の立場に立とうとする姿勢を示したのである。このような外交姿勢は、宗教の領域においても影響を及ぼし、米国系プロテスタント教会が、カトリック教徒が多数を占めるラテンアメリカ諸国における「プロテスタント化」を推進する一要素ともなった。この現象を教育史の視点から考察したジャネ・アルメイダは、19世紀を通じて多くのアメリカ人

宣教師がブラジルで活動していた事実に注目している。彼女によれば、彼らは宗教教育を隠れ蓑にしつつ、アメリカ的価値観—すなわち民主主義と共和主義—を、当時立憲君主国であったブラジル社会に浸透させようとしていたと指摘している。

マニフェスト・デスティニーに見るラテンアメリカへの影響

続いて、モンロー主義と並んでプロテスタント伝道の基盤となった「マニフェスト・デスティニー（Manifest Destiny）」について見ていきたい。この言葉は、1845年にジャーナリストで雑誌編集者のジョン・オサリヴァンによって提唱された。彼は、北米大陸を西へと拡大していく「西漸運動（westward movement）」を、神によって定められた運命（destiny）であり、それが誰の目にも明らか（manifest）であると主張した。この言説は、アメリカの領土拡張主義を正当化するスローガンとして広く受け入れられ、国内に急速に浸透し、米墨戦争（1846年～1848年）を引き起こす一因となったと考えられている。実際、この戦争に勝利したアメリカは、当時のメキシコ領土の約半分にあたる現在のカリフォルニア州、ニューメキシコ州、アリゾナ州などの広大な地域を獲得することとなった。

その後、この領土拡張政策は支配圏の射程を広げ、西漸運動に続いて次第に南へと領土を拡大する動きが増幅した。この時点ですでに、「神の定め」にはラテンアメリカ諸国の「脱カトリック化」の理念が組み込まれていた。この点について、アメリカ南部の視点から拡張問題と黒人奴隷制を考察した歴史学者ピーター・アイゼンバーグは、米墨戦争後にキューバ、メキシコ、ニカラグアなどがたびたび米国による軍事的侵略や領土的拡張の犠牲になった事実を強調し、とりわけニカラグアの謎多き傭兵ウィリアム・ウォーカーに注目して議論を展開した。彼は1855年にニカラグアの内戦に加わり、軍の最高司令官となって実権を掌握した。その翌年、ニカラグア大統領に当選すると、故郷のアメリカ南部を慕い、黒人奴隷制を採用、英語を公用語に定め、カトリック教会に代わってプロテスタント教会を奨励した。しかし、大多数がカトリック教徒でスペイン語話者であったニカラグア人はウォーカーの政策に反発し、最終的に彼は失脚して国外追放された。

それでは、ブラジルにはウォーカーのような人物が存在したのであろうか。ブラジルの場合、ウォーカーのような傭兵とは異なり、1人の神学者と2人の宣教師が渡航し、彼らの福音の鐘を鳴らした。彼らはダニエル・パリッシュ・キダー（Daniel Parish Kidder）、ジェームズ・クーリー・フレッチャー（James Coolie Fletcher）、アシュベル・グリーン・サイモントン（Ashbel Green Simonton）である。彼らはアンテベラム期にブラジルで伝道活動を行った、初期のアメリカ人宣教師である。次号では、彼らについて詳しく見ていきたい。

[参考文献]

Janes Soares de Almeida. “Missionárias Norte-Americanas na Educação Brasileira: Vestígios de Sua Passagem nas Escolas de São Paulo no Século XIX”. *Revista Brasileira de Educação*. 12(35), 2007, p. 327-342.

Peter L. Eisenberg. *A Guerra Civil Americana*. São Paulo: Brasiliense, 1982.

第2講：「元の理」の人種理論・平等思想

おやさと研究所講師
中西 光一 Mitsukazu Nakanishi

本講座では、異文化伝道における「たすけの理ばなし」および「人間救済の倫理」としての「元の理」の重要性について論じた。「元の理」には、「陽気遊山を見たい」という親神による人間創造の意図が明確に説かれており、この教えを単なる創造神話やダーウィンの進化論と混同してはならない。その点を踏まえたうえで、本講座では、南北アメリカにおける黒人奴隷制と人種差別の歴史を背景に、「元の理」が示す人種理論と平等思想について、筆者の見解を述べた。南北アメリカの黒人奴隷制と人種主義の興隆

はじめに、「教祖の御在世当時の世界」と題して、南北アメリカにおける黒人奴隷制と人種主義の歴史を概観した。黒人奴隷制は、15世紀から19世紀にかけて、新世界における近代資本主義システムの形成に寄与した。とりわけ、アメリカ合衆国南部、ブラジル、キューバなどの地域では、それが最も合理的かつ経済的な労働形態と見なされていた。しかしその一方で、黒人奴隷は過酷な条件のもとで働かされ、非人道的な扱いを受けていた。ブラジルの場合、1535年から1888年にかけて500万人以上の黒人奴隷を輸入し、アメリカ大陸で最も多くの奴隷を受け入れた国となった。

このような状況の下、白人（支配者）と黒人（奴隷）のあいだに強固な支配従属関係が形成され、白人至上主義（白人が他の人種よりも優れているとする思想）が南北アメリカ社会に根付くこととなった。この思想は、白人による支配を正当化しただけでなく、黒人を人間（＝白人）のなりそこないとみなして非人間化し、人種間の分離や隔離を正当化した。その際、ヨシア・C・ノット（1804年～1873年）、サミュエル・モートン（1799年～1851年）、ルイ・アガシー（1807年～1873年）といった人種主義者たちは、科学的な論拠に基づくと称して、人種差別を助長した。彼らは、人類単一起源説（モノジェニズム）に反して人類多起源説（ポリジェニズム）を主張し、ダーウィンの進化論を否定しつつ、人種主義（racism）を南北アメリカ諸国で推進した。具体的に、彼らの人種理論は以下のような手法に依拠していた。

まず、ノットは頭蓋容積（頭蓋骨内部の容積の尺度）の分析を通じて、人種間の知的能力の差を測定しようとした。彼は、頭蓋骨の大きさを知能の指標と見なし、「ネグロイド（黒人種）」は「コーカソイド（白人種）」よりも平均的に頭蓋容量が小さいと主張し、前者は後者よりも知能が劣っていると結論づけた。次に、モートンは「頭蓋測定学」という手法を用いて、約1,000点以上の各人種の頭蓋骨を収集し、それらを分類・測定した。その結果、彼は黒人が古代エジプト時代から白人の奴隷であり、その従属的性質は19世紀前半まで一貫して続いていると主張した。そして、エジプトにおけるピラミッドをはじめとする芸術・建築といった文明的偉業を、「白人の知能の高さ」の証左であると見なした。さらに、アガシーは人種間の不平等を「自然の法則」と見なし、外見的観察や固定観念的な比較を通じて、人種を評価した。彼は、頭蓋骨の形状や顔貌、肌の色といった表層的特徴のみを観察・記録し、実験や統計による裏付けを行わず、思弁的な人種理論に基づいて、異人種間の混淆は白人種の退化を招くと主張した。

「元の理」にみる人種理論と平等思想

こうした時代に説かれた「元の理」の教えは、「めざる一匹」を支柱とする人類単一起源説を暗示しており、教祖が提唱した「一れつ兄弟姉妹」の教えは、人種平等を訴えるものであった。それは、

当時の奴隷制や人種主義の勃興に対して、人間世界を救いたいという親神の神意を表していた。この点、『天理教教典』第3章に説かれる「元の理」では、性別の違いを除いて、人種間の差異を示唆する記述は見られない。これは、「人類に、親神の子供たるの自覚を与え、一れつ兄弟姉妹としての親和を促し、親子団欒の陽気ぐらしの世と立て替えようとの思召」（33頁）という記述に基づいており、そこには平等思想とともに、“陽気ぐらし”という親神による人間創造の意図が明確に説かれている。

また、深谷忠政は『教理研究 元の理—改定新版—』（1982年）の中で、「世界中の人間は、元のちばにおいて宿しこまれたもので、一列兄弟であり、互いに助け合って陽気ぐらしをする（中略）この根本原則（天理）に違反する時、それはほこりとなり、それがつまかさなって悪いいんねんとなることを教える。」（114頁）と指摘している。この点で想起されるのが、「おふでさき」の一首である。すなわち、「せかいにハこのしんぢつをしらんから みなどこまでもいつむはかりで」（十四：26）というお歌において、「いつむ」（＝萎縮する、いじける）という行為は、黒人奴隷制と人種主義を象徴するものと捉えられる。これは「根本原則（天理）」への違反であると同時に、“人類のほこり”の現れであり、だからこそ教祖は、人間救済の倫理としての「元の理」を説かれたのである。

「元の理」の救済論には、人種差別の克服にとどまらず、男女平等の思想も包含されている。実際、奴隷制においては、男性奴隷と比較して、女性奴隷は二重の苦しみを強いられた。彼女たちは、奴隷主や農園の監督者、さらには男性奴隷による強姦の被害に遭い、妊娠と出産を繰り返す中で、「奴隷の繁殖（slave breeding）」のための道具として扱われた。当時の奴隷制には、「子は母の身分に従う（Partus Sequitur Ventrem）」という慣習が存在しており、女性奴隷から生まれた子どもは、自動的に奴隷として扱われた。そのため、性暴力の被害を受けた彼女たちの「女性」としての尊厳は、制度的に一貫して蹂躪されていた。

これに対して、「元の理」は男女平等を明確に謳っている。例えば、矢持辰三は『天理教の人生観』（2000）の中で、「元の理」について、「親神が、人間創造に際して、まず人間を夫婦として創造されようとする意図が明らかに示される。」（109頁）と指摘しており、人間創造における夫婦（＝男女）の意義が強調されている。また、「おふでさき」にも、「この木いもめまつをまつわゆハんでな いかなる木いも月日をもわく」（七：21）と歌われており、ここにも親神による性別間の調和と相補性が示されていると解釈できよう。

続いて、現代にも通じる「元の理」の教えについて言及した。21世紀を迎えた今日においても、人種差別の問題は世界各地で依然として根強く残っている。アメリカ合衆国のジョージ・フロイド事件（2020年）やコロナ禍におけるアジア人に対するヘイトクライム、外国人差別などに見られるように、人間の心はいづむばかりである。日本においても、移民、難民、外国人労働者に対する差別が深刻な問題となっており、多文化共生社会の実現は喫緊の課題となりつつある。最後に、これまでの議論を整理したうえで、“多文化共生社会”のバックボーンとして、「一れつ兄弟姉妹」および「陽気ぐらし」を掲げる「元の理」の思想が、極めて重要である点を強調し、発表を締めくくった。

第 376 回研究報告会（2025 年 4 月 15 日）

「非信者への『祈り』というケア～天理よろづ相談所病院『憩の家』の事例から」

山本 佳世子（天理大学人文学部准教授）

病院付き宗教者の活動はスピリチュアルケアと宗教的ケアに大きく分けられ、非信者に対しては前者を行うことが求められてきた。しかし天理よろづ相談所病院「憩の家」では事情部講師による「おさづけの取り次ぎ」という宗教的ケアが非信者患者に対しても長年行われている。非信者に対する宗

教的ケアがいかに成り立つのか。「憩の家」の事情部講師への面接調査および患者への質問紙調査の結果を報告した。調査からは、宗教者の真摯な祈りが非信者患者のケアになっていること、患者が亡くなられた後にできるケアがあることがわかった。ケアとしては「感謝」に基づくケア、「間接的宗教的体験」に基づくケア、「死者へのケア」がある。これらは布教のためのケアではなく、それが宗教者として患者のためにできる最善のケアだという確信に依っていた。なお、他宗教の病院付き宗教者に見られた「他宗教の宗教的行為への配慮」は「憩の家」では見られなかった。

2025 年度おやさと研究所 公開教学講座 「元の理」の学術的研究とその新しい展開を求めて

- | | | |
|--------|----------------------------|--------------|
| 第 1 回 | 4 月 25 日（金）「元の理」研究入門 | 金子昭 研究員（終了） |
| 第 2 回 | 5 月 25 日（日）「元の理」の人種理論・平等思想 | 中西光一 研究員（終了） |
| 第 3 回 | 6 月 25 日（水）「元の理」の社会思想 | 澤井治郎 研究員（終了） |
| 第 4 回 | 7 月 25 日（金）「元の理」と布教伝道 | 尾上貴行 研究員 |
| 第 5 回 | 8 月 25 日（月）「元の理」と福祉思想 | 八木三郎 元研究員 |
| 第 6 回 | 9 月 25 日（木）「元の理」の見立て・象徴論 | 澤井真 研究員 |
| 第 7 回 | 10 月 25 日（土）「元の理」と天理教学 | 島田勝巳 研究員 |
| 第 8 回 | 11 月 25 日（火）「元の理」と「こふき」 | 岡田正彦 研究員 |
| 第 9 回 | 12 月 25 日（木）「元の理」と異文化理解 | 森洋明 研究員 |
| 第 10 回 | 1 月 25 日（日）「元の理」の人間学／人類学 | 井上昭洋 所長 |
| 第 11 回 | 2 月 25 日（水）「元の理」のジェンダー論 | 堀内みどり 主任 |
| 第 12 回 | 3 月 25 日（水）「元の理」の学際的研究の可能性 | 佐藤孝則 元研究員、他 |

（2025 年度「教学と現代」）

日時：毎月 25 日 13：00～15：00

会場：天理大学研究棟 3 階 第 1 会議室

事前申し込みは不要です。
直接会場にお越しください。

※但し、第 10 回（1 月）、第 11 回（2 月）はふるさと会館大ホール



場所
南右第二棟
1階展示スペース

時間
9:00~16:00

天理大学附属おやさと研究所
協力
天理大学ふさと会
天理大学年史館編纂

天理大学 100年

第2期 2025年 9月13日(土) ~ 28日(日)

写真展



おやさと研究所では、写真展「天理大学 100年」の第2期を2025年9月13日~28日、おやさとやかた南右第二棟にて開催します。

第2期では、第1期での天理大学ふさと会所蔵パネルの展示に加え、教祖140年祭を意識した内容を企画しています。

皆様方のご来場をお待ちしています。

下記写真は第1期の様子



グローバル天理
第26巻 第8号 (通巻308号)

2025年(令和7年)8月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋
編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所 (HP)



印刷 天理時報社

Printed in Japan